
ドッペルゲンガー

徳井紘子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【Nコード】

N1052F

【作者名】

徳井紘子

【あらすじ】

学園の裏庭で見つけた四つ葉のクローバーを押し葉にして、真冬の明け方4時きっかりにそれを持って北校舎へ続く渡り廊下の真ん中に立つと「モウヒトリの自分に遭遇する…」噂からつながるよう
に起こる不思議な事件。友人の変化。その真相は…

もう一人の自分

学園の裏庭で見つけた四つ葉のクローバーを押し葉にして、真冬の明け方4時きっかりにそれを持って北校舎へ続く渡り廊下の真ん中に立つと「モウヒトリの自分に遭遇する…」

そんなへんてこな噂がうちの学園に広がっていた。

序・開始

あたしは噂や、いわゆる「学校の七不思議」的なものをほとんど信じない部類の人間だった。

周りでクラスの女子達がキヤーキヤー言っているのを横目でしらけて見ている。いつもそういう立場だ。今回の噂をあたしが気にかけてしまったのは「モウヒトリの自分に遭遇する」という事。

信じるというよりやっぱり「ありえない」と思っていたことから始まった。

あれは今年の7月。高校生活最後の夏休みが始まる直前の出来事だった。

「ねえ夏美！聞いた？」

クラスメイトの怜奈があたしのところへ飛んできて息もきれぎれに目を輝かせてこの「噂」について話し出したのだ。

「うちの学校の校章がなんで四つ葉のクローバーかって話。アレ、

初めの校長がこの庭で四つ葉のクローバーを見つけて…って話だったじゃん？ 続きがあるんだって！！」

怜奈はいつでもこの手の噂を信じていて、あたしが信じないと知りつつも必ず報告しにくるのだ。

いつもあたしに冷たくあしらわれるだけなのによく飽きずに話してくるものだ…。

「うんうん、で？ その続きって？」

いつものように次の時間の教科書をばらばらめくりながら話を聞き流そうと体制を整えると、怜奈は急にいつものようなハイテンションではなく声のトーンを落として語りだした。

「あのね。初代の校長って二重人格だったんだって。で、いつも見つけたクローバーの対角になっている2枚が気がつくときぎられてさらに粉々になってたんだって。それって二重人格のモウヒトリがやったことらしいんだよね。だから、ちぎられないように校章として模ったらしいよ？」

（モウヒトリの人間？）一瞬そこに気をとられたが、怜奈はさらに話を続けていた。

「学校ができた頃はまだ結構四つ葉のクローバーって学校の裏庭で見つかったらしいんだけど、うちらなんか見たことないじゃん？ それも、当時の校長がほとんど枯葉剤を撒いてなくしちゃったって噂なんだよね。でもほかの雑草は生えてるのに…ねえ、不思議じゃない？」

「そだねえ…。」

「そんでさ！ 裏庭で四つ葉のクローバーを見つけて押し葉にして、真冬の明け方4時きっかりに北校舎に向かう渡り廊下の真ん中に立つと、なんと！ モウヒトリの自分に会えるって噂なんだよー！ ねえ、どう思う？」

ここまで真剣に話をしている怜奈を地の底に落とすのは悪いが、やっぱりあたしはそう言う事を信じられない。信じようとすること自体難しい。というわけでいつものようにあしらってしまった。

「誰でも心の中で葛藤してるから、それをモウヒトリの自分って考えたら誰にだってしているし、そんなの改めて目の前に出てくるようなもんじゃないでしょ？つーか、たまたま鏡とかが置いてあって自分がうつったとかそんなんじゃないの？」

やっぱりこういった類の話は信じるに値しない。ましてや自分がモウヒトリいるなんて。

「でもほら、なんか自分にそっくりな人を見ると死ぬとか…んと…ゲッター何とか…あれ？違う？なんかそんな英語あったじゃん。」

真剣に話す怜奈はかわいい。ついついいじめたくなってしまう。それに比べてあたしは…

「ドッペルゲンガー。ちなみにドイツ語ね？自分で自分の姿を見る現象の事だけど、それも脳障害が関係してるみたいだし。見ようと思って見られる者じゃないよ。」

冷静に、自分の貧しい知識の中から分析して返事をする。怜奈は唸って自分の席へ戻っていった。

その話を聞いてから約半年後。もうそんな噂もあたしの中で忘れつつある頃だった、渡り廊下に四つ葉のクローバーの押し葉を残してクラスメイトの一人が失踪したのは。

事件

家族の話によると、朝起こそうと父親が彼女の部屋へ行ったところ娘の姿がなかったらしい。

部屋は暖房がついたまま、まるですぐ帰ってくるつもりで出かけた様子だったそうだ。

どうやら彼女は明け方急に出かけて行き、そのまま帰らなかった。部屋には鞆や教科書なども置いたまま、ただ制服だけがなかったそうだ。

学校に行く為に制服を着て出かけたらしい。

この不可解な出来事はあつという間に学校中の話題になった。例に漏れず怜奈もその一人だ。

しかも今回はたちの悪いことに失踪したクラスメイトが怜奈の友人だったのだ。ただの噂好きな女の子でいられる状態ではない。

もし、この事件がほかのクラスの子の話だったらきつと今までのように騒いだけなのだろう…と考えるあたしは酷いヤツだと自分でも思う。

しかし彼女は震えていた。

「私が…あんな噂信じて話して回ったからこんなことになっちゃったんだわ…」

「そんなことないよ」と声をかけてあげられない。怜奈が騒いで回ったのは事実だし、それに振り回された子がいたというのも事実だとあたしは思ったから。

怜奈はともかわいしい、友達思いの子だと思っけれど噂や占いに關しては若干向こう見ずで突っ走る部分があると思っていた。

「確かに怜奈はこの手の話になるとはしゃぐけど、それだけのせい

じゃないと思うよ。実行するかしないかは本人が決めることなんだから。」

本当は「そうだよ、怜奈はしやぎすぎだよ。」とズバツと言ってしまいたいのに言えないのもあたしの嫌いなところだ。

「そうかもしれないけど…でもどうしたらいいんだろう。」

半べそ状態でうなだれたまま悩む怜奈に

「とりあえず、今後は少しはしゃぐのを控えるように気をつけたらいいんじゃない？」と声をかけた。

実際あたしたちが何か動いたところでクラスメイトが戻ってくるわけではないし、できることがあるわけでもないと思う。あたし達にできることは、クラスメイトの帰りを待つこと。それだけなのだから。

そんな中、あたしは怜奈の言っていた「モウヒトリの自分に遭遇する」という言葉が心の中でずっと引っかかっていた。怜奈がこの噂を聞いたとき自分で言った「心の中で葛藤するのは誰にでもあること」。これは自分に言い聞かせている部分もあった。

誰にも打ち明けたことのないあたしの悩み。

誰にも言えない悩み。

自分は二重人格なのではないかと思うほど、心の中に凶暴なあたしが存在している。

時々他人に対して極度の不信任や酷い時など殺意までも抱く瞬間がある。

それがあたしの中の「モウヒトリの自分」なのではないかと考えた回数は両手では足りないくらいだった。もしもそんな自分が目の前に現れたら…間違いなく「アタシ」はあたしを殺すだろう。

そんな悩みを持っていたからこそ、あたしは今回の噂に少し反応し

てしまったのだ。

自分的にはとても納得がいかない。噂を信じないあたしと、もしモウヒトリの自分に会ったら…と考えるあたし。この時点ですであたしの中で葛藤が起きている。

だけど、このレベルはまだ良い方。過去に数回、学校の先生から不本意なお叱りを受けた時は自分がおかしくなるのではないかと思うくらい心の中で凶暴なあたしが暴れていた。

そして初代の校長、この学園の創設者が二重人格だった…と。噂を信じないあたしでも、「何の因果だよ…」と思ってしまうた。

——もし、本当にモウヒトリの自分に会えるのならばいつそ殺してもらいたい。

——それは逃げなのかもしれないけれど、そうすればもう悩むことはないから…。

連鎖

クラスメイトが失踪してから数日後、あたしたちは新たな情報を耳にした。

四つ葉のクローバーが落ちていた付近に白いチョークで「印」を結んだようなものが書かれていたということだ。ここ数日雨が続き、さらに渡り廊下は雨が吹き込む場所なため、次の日には消えてしまっていたらしいが「印」のようなものを見た生徒がいたのだ。

失踪したクラスメイトが書いたもののなか、ほかの誰かが書いたもののなか。それは誰も知る術がなかった。

この話を耳にしたとき、怜奈はいつものようにはしゃぐことはなかった。

さすがに人一人が行方不明、しかも怜奈の仲の良いクラスメイトが相手だから騒ぐ事もないだろうが。

しかし、あまりにも興味を示さない怜奈をみるのが初めてだったためあたしは少し驚いた。

何かしら別のベクトルでのアクションを起こすと思っていたのに…。

「印」だなんて、話がオカルトチックになっていく。この時あたしは「やっぱり噂は信じない」という結論に至った。

今までにあたしは幽霊どころか、心霊現象的なものに一度もあったことがない。

そんな状況の中でクラスメイトが「モウヒトリの自分」に遭遇して失踪したとは考えにくい。

やはり何らかの事件か事故に巻き込まれてしまったのではないか。ともかく早く彼女が見つかることを祈るばかりだった。そうすれば

すべて真実がわかるはず。

しかしその後、2週間経つてもクラスメイトは見つからなかった。彼女の家族は早々に警察に捜索願を出していたが警察のほうでも捜査が難航しているようで、事件なのか事故なのかすら未だにわかっていない。

真冬の明け方4時ということもあって目撃した人もいないらしい。

怜奈は徐々に元気を取り戻していたが、たまにふと見せる寂しげな表情が痛々しかった。心なしか体もやつれていた。

そして事件は再び起こった。

一人目のクラスメイトが失踪してからちょうど1カ月後、まったく同じ状態でまたクラスメイトが一人失踪したのだ。

しかも今回は雨が降らなかったため「印」のようなものを見た生徒が前回より多かった。

カメラ機能のある携帯で写真を撮った生徒までいた。その「印」のようなものは直径50センチくらいの二重円形の中に4つの葉が描かれたものだった。

不可解なのは、二人目の失踪したクラスメイトも怜奈の友人だったということだ。

なぜ連続して彼女に関わるクラスメイトが失踪してしまったのか。さすがのあたしも心配になり怜奈に声をかけるため彼女に近づこう

とした。

その時。

一瞬、ほんの一瞬怜奈の後姿が変化したように見えた。

彼女はダークブラウンのセミロングヘアなのだが、その髪型が腰のあたりまである漆黒のロングヘアに見えた気がした。

当然気のせいだと思い改めて声をかけた。

「怜奈、大丈夫？」

ゆっくり振り返った彼女の目は以前より鋭く、目の奥に何か光るものがあるように見えた。

あたしは驚き、一歩後ずさった。

「大丈夫よ。友達が二人も消えちゃうなんて信じられないけど…でも」

「えっ？」声として聞こえたのではなく、心の中に響いてきたような最後の彼女の言葉。

「フフ…」

怜奈が変わった。あたしは驚き、教室を飛び出した。「夏美…どうしたの？」という声が教室から聞こえたがその場にはいられなかった。

そしてあたしは例の渡り廊下へと、まるで導かれるように走ってきた。そこにはうつすらと白いチョークの「印」が残っていた。

二重円形の中に描かれた4枚の葉。そして…響いてきた怜奈の声。

「。。。」

怜奈の言葉を理解することができなかった。いったい彼女の身に何が起こったのか。

四つ葉のクローバー。

白いチョークで書かれた印。
この渡り廊下。

怜奈の友達二人。

彼女たちに共通することは？
そして怜奈の言葉…

「彼女達は幸せなのよ。」

決意

あたしは考えた。基本的に誰ともつるまないあたしは彼女たちの詳しい情報を持っていない。

怜奈も友達ではあるが、いつも一緒にいるという仲ではなく他のクラスメイトよりはあたしと話をするという程度のものだった。

ふと渡り廊下から横を見るとそこは裏庭に続く場所だった。

今では見つからない四つ葉のクローバーが生えていたという裏庭。

次の授業のことなど忘れてあたしは裏庭へと足を踏み入れた。

今はきれいに剪定された木が植えてあり、地面には「竜のひげ」などの草もきれいに植えられている。

定期的に庭師さんが手入れをしているらしい。

そして、あたしは見つけてしまった。裏庭の隅に生えているクローバーを。

しかし、どれも三つ葉でさすがに四つ葉ではなかった。

（もし、今でも四つ葉のクローバーが生えていたら……）失踪した二人のクラスメイトはここから四つ葉のクローバーを見つけたのだからうか。あたしはその場にしゃがみこみ、無我夢中で四つ葉のクローバーを探し始めた。

見つけたいという気持ちと、見つけたくないという気持ちに葛藤しながら。

不思議なことに、あっさりと四つ葉のクローバーを見つけ出してしまった。

「あつた……」

茎で千切れてしまわないように丁寧に根から抜き、ポケットから取

り出したハンカチの中に包み込む。

すでにこの時点であたしの心は決まっていたのだ。

（あたしもやるしかないんだ）と。いや、二人目のクラスメイトが失踪し怜奈の態度がおかしいと感じた時には決まっていたのかもしれない。

怜奈は友達だと思うし、仲も良い方だと思う。しかし怜奈の身近な人間が二人も失踪し、さらにさっきの彼女の態度を思い返すといくら他人に無関心なあたしでも気になってしまう。

ハンカチに包んだ四つ葉のクローバーをポケットにしまい、あたしは教室に戻った。

クラスでは4時間目の先生が授業を進めていてあたしが教室に戻ると思議そうな、心配そうなんとも言えない顔で

「どうした？具合でも悪かったのか？」とたずねてきた。確かにあたしは今まで無断で授業をサボったりしたことなどないから、当然の反応だろう。

「すみません。体調が悪くて保健室に行こうと思ったのですが少し外で休んだら良くなったので戻ってきました。ご心配おかけしました。」

そういつて自分の席に着くと、斜め前に座っている怜奈が振り返って口だけ「大丈夫？」と動かして聞いてきた。

さっきの怜奈の不可解なオーラは一切感じられず、いつもの怜奈だった。

（さっきのは一体なんだったの？）戸惑って目をそらしてしまいそうになったが、そうしてしまうと彼女に不信感を抱かせてしまう。平静を装った。

あたしは同じように「大丈夫。」と口を動かし、彼女に笑顔を向けた。

すると安心したように彼女は前を向いて授業を聞き始めた。

実行

これからあたしがすること。

他のクラスメイトに失踪した二人の共通点を聞くことからはじめなければならぬ。

「モウヒトリの自分」に会うためには真冬の明け方4時きっかりという時間指定がある。すでに2月初旬。ゆっくりしている暇はない。

一日の授業を終え、あたしは下校準備をしている子たちの輪に近づき声をかけた。

失踪した二人の共通点はないか？と。

意外にも答えはすぐに返ってきた。

「あの二人、父子家庭なのよ。だから気が合う部分ってあったんじゃない？ うちらにはわからないけどさ。」

そんな共通点があるのを知らなかったのはクラスであたしだけだったのだろうか。正直驚いた。

「そつえば、怜奈も父子家庭だったよね。」

「えっ？」

「あれ、夏美しらなかったの？ 結構仲良くしてるから知ってるかと思ってたけど。」

お互い家庭環境について話すことなど一度もなかった。

そして、あたしも父子家庭だった。これはなんの因果だろう？ あたしは母の顔を見たことがない。

あたしを産んですぐに亡くなったのだ。父が「写真があると悲しくなるから」という理由で写真はすべて処分してしまったため、写真ですら見たことがないのだ。

これは失踪した二人の共通点ではなく、あたしと怜奈を含む4人の共通点だったのだ。

心に火がついた。

あたしがこの不可解な出来事を解明しなければならない。

急いで家に帰りポケットにしまっておいた四つ葉のクローバーを取り出し、押し葉を作り始めた。

最低でも4日はかかる。

一通りの作業を終え、後は毎日状態を見ながら完成を待つ形になった。

押し葉が完成するまでの数日間、あたしは極力怜奈と関わるのをやめた。遠目に観察をした。

怜奈は基本的にいつもの明るい女の子だったが、1日に1回は必ずあの不思議なオーラを放っていた。ただ、それは他のクラスメイトはまったく気づいていないようだった。

周りに友達はいるのに、どうして気づかないのだろう。クラスメイトと話している時、不意に鋭い目つきになることもあった。それなのに周囲の人間は誰一人怜奈に対して不信感を抱かず、いつも通りの対応をしているのだ。

あたししか気づかない？いや、そんなの納得がいかない。でも、それが現実だった。

押し葉を作り始めて5日目。やっと完成した。

薄い茶の入った四つ葉のクローバーはきれいに乾燥して静かな憂いを帯びていた。

予定より1日多く費やしてしまったが、まだ真冬といえる時期。あたしは渡り廊下へ行く心の準備をした。

あたしもこの家に帰ってこられなくなるのかもしれない。父には心配をかけてしまう。

いや、あたしは帰ってくる。このわけのわからない出来事を目の当たりにして、なおかつ帰ってくる。

そう心に誓った。

父が寝た後、居間のテーブルに手紙を置いた。

「お父さん、あたしこれから自分がする事が正しいかわからない。でもこのまま放っておく事はできません。あたしにも関係することかもしれないし、クラスメイトにも関係することだから。心配をかけてごめんなさい。あたしは帰ってくる。遅くなるかもしれないけど帰ってくる。

いつてきます。

夏美」

きつちりとアイロンをかけた制服に身を包み、マフラーをして明け方3時40分、あたしは家を出た。

遭遇

学校までの道はほぼ真っ暗で、ところどころに灯る街灯がほんのりと一部を照らしているだけだった。不思議と恐怖感はなかった。むしろ暖かい気持ちがあった。

学校が近づくにつれその暖かい気持ちは増していった。

15分かけて学校までの道を歩く。いつも通っている道なのに暗いというだけでここまで雰囲気が変わるものだとは知らなかった。

学校に着くとあたしは迷わず例の渡り廊下へと向かった。

北校舎へと続く渡り廊下。なぜか他の場所よりも寒く感じる。

夜の校舎は真っ暗なのに渡り廊下のところだけほうつと青白い明かりに照らされているようだった。

近づくとその月は月光によるものだとわかり、さらに不思議な気持ちは押し寄せてきた。

あたしが聞いた噂。「真冬の4時きっかりに渡り廊下に四つ葉のクローバーを押し葉にして持っていくと「モウヒトリの自分」に遭遇する」それだけだ。白いチョークで書かれた印などこの噂にはなかった。

一歩ずつ渡り廊下に近づく。コンクリートの段差を一段上り地面を見た時、足がすくんだ。

印がかすかな光を帯びて浮き上がって見えているのだ。しかし、ここで引き返すわけにはいかない。

あたしはモウヒトリの自分になんか会わないし、何も起こらず家に帰るのだ。そう心の中で唱え続けた。

「来てくれたんだね、夏美。」急に背後から声がして振り返るとそこには…やっぱり怜奈がいた。

こういった現象は信じない。信じたくない。が、怜奈は何かに取り憑かれているような目をしていた。

いつも教室で会う怜奈とは確実に違う人物だった。

そう、たまに見せていたあの不思議なオーラをまとった怜奈だった。

（もし、本当に取り憑かれているのだとしたら…怜奈ではない怜奈がクラスメイト二人をなんらかの形で消した…もしくは殺してしまったのかもしれない）

そんなことを真剣に考えてしまうほど怜奈の目は冷たく、あたしを見つめていた。

「怜奈、いったい何をしたの？」じりじりと近づいてくる怜奈に少しひるんでいるあたしは後ずさりをしながら話しかけた。

「あたしは何もしていないよ。ここに呼んでいるのは…あたしたちのお母さんだよ。」

彼女の言っている意味がまったくわからなかった。

「あたしたちの…お母さん？」

あたしには母親はいない。そして怜奈の言っている「あたし」たち『』という言葉。

あたし一人ではない、あたしと怜奈？それとも…

「あたしのお母さんは死んでるのよ？それにあたしたちって何？意味がわからないよ。」

話をしながらも怜奈は少しずつ近づいてくる。目の奥には以前に見

た鋭い光。

――怖い

恐怖心が心の中を埋め尽くす。頭の中は疑問でいっぱいのはずなのに、言いたいことが一つも口から出てこない。それほど今までに見たことのない怜奈の顔は冷えていた。

笑顔を浮かべているのに、手に触れれば凍えてしまいそうなほど冷えていた。

「夏美、前に話したよね、この学園の校長の話。校長先生があたしたちをここに導いたのよ。この世に作り出してくれたのよ。」

また怜奈が良くわからない事を言った。さっきまで母親がここに呼んだといっていたのに、今度はこの学園の校長。怜奈自身が混乱しているのだろうか？

思い切って彼女に近づいてみようと思ふと足を動かそうとしたとき……あたしの足はぴくりとも動かなかった。

まるで足全体が重い鉛のように地面にへばりついているようだ。

足元を見ると、そこにはかすかな青白い光を帯びた印があった。少しずつ後ずさりをしたせいで、あたしは印の真上に来てしまった。そして、そこから一步も動けなくなってしまったのだ。

これは心の中の恐怖心から動けなくなっているのだ、そうに違いはない。

「……ッ」

声が…出ない…。

怜奈に話しかけようとしたのに声が出ない。
まるで金縛りにかかってしまったような。
背筋を冷や汗がつたう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1052f/>

ドッペルゲンガー

2010年10月10日01時13分発行